

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1990年

6月号
(通巻99号)
400円

ポーランド月報

「連帶」の逆説 / P・シュヴァイツエル
「小黙示録」の世界 / T・コンヴィツキ



MACIEJ UFNALEWSKI

☆☆ ポーランド月報 1990年6月号（通巻99号） 目次 ☆☆

ポーランド「連帯」はどこへ行く？……………	3
第2回大会が示したもの	
「連帯」の逆説——多元主義への道？……………	4
ピオトル・シュヴァイツェル	
「小黙示録」の世界……………	11
タデウシュ・コンヴィツキと語る	
ポーランド日誌 1990年3月15日～4月18日……………	2／18・19

ポーランド日誌

1990年3月15日～4月18日

3月15日 英国の貿易・産業担当相ポーランド訪問。
3月17日 ブラハでワルシャワ条約機構外相会議。ドイツ統一が話し合われ、統一は欧州安全保障と結びつけて進める、国境変更は認めない、NATOとワルシャワ条約機構は当面存続、などで合意。統一ドイツのNATO加盟については、加盟を認めてよいとするポーランド、チェコ、ハンガリーと中立ドイツを主張するソ連が対立、物別れに。●ワレサ委員長、チェコのハヴェル大統領と会談。●『シェチボスピリタ』紙によれば3月15日現在の失業者は21万6000人で、年初の4倍に。●『ガゼタ・ヴィボルチャ』によれば2月の物価上昇率は前月比23.9%。

3月19日 マゾヴィエツキ首相、地方選挙を5月27日に行うと発表。

3月20日 マゾヴィエツキ首相、1週間の日程でアメリカなど八カ国訪問に啟発。

3月21日 マゾヴィエツキ首相、ホワイトハウスでブ

ッシュ大統領と会談。ブッシュ大統領はドイツ＝ポーランド国境問題で現国境維持を求めるポーランドの立場に支持を表明。両首脳は、ポーランドへの投資促進をめざす協定に調印。●ベルギー訪問中のスクビシェフスキ外相、統一ドイツのNATO加盟に反対はしないが、ソ連への何らかの保証あるいは保障が必要だと述べる。

3月22日 マゾヴィエツキ首相、ブッシュ大統領と日程外の第2回会談。共同記者会見でブッシュ大統領は、国境問題で両国に若干の見解の相違があったことを認める（ポーランドは統一前に東西両ドイツと別々に国境条約を結ぶことを望んでいる）。●下院、リトニアが「自由な民族の一員」になったことを歓迎する決議。●下院は、旧共産党系の大出版・印刷企業『RSW「プラザ』の解体を決議。

3月23日 マゾヴィエツキ首相、米国議会代表団と会談。●旧統一労働者党の院内会派である民主的左翼議会グループが分裂、多くの議員は、T・フィッシュバフ（社会民主連合指導者）を中心に社会民主クラブを結成。

3月24日 マゾヴィエツキ首相、シカゴ訪問・スクビ
【18頁へ続く】

ポーランド「連帯」はどこへ行く？

第2回大会が示したもの

II nd Congress of Solidarity
Gazeta International, No. 10, May 10, 1990

4月19日から25日まで、ポーランド「連帯」の第2回全国大会がグダンスクで開催された。1981年秋の第1回大会以来9年ぶりのことであった。大会はレフ・ワレサを圧倒的多数で委員長に再選して終わったが、この9年間のうちに「連帯」を取り巻く状況はポーランド内外において文字通り激変を遂げ、「連帯」自身、極めて厳しい再スタートを迫られたというべきであろう。「連帯」系紙『ガゼータ・インターナショナル』第10号、1990年5月10日付、から大会の概要を報告する。

「第2回大会を迎えたグダンスクに興奮は感じられなかった。9年前、同じ町で第1回の大会が開催されたときは、ポーランドのすべて（と世界の半分）が自由のメカニカに赴くようにグダンスクに集まつたというのに。」

しかも、ポーランド全土から集まつた代議員を迎えたのは、貨上げを要求して地元の「連帯」支部と官製労組OPZZが共同で組織した交通労働者のストライキであった。

「家を出てから戻るまで12時間、そのうち9時間はハンドルを握っているが、これだけ働いて給料は80万ズロチ（約1万3,000円）。パンひとつ塊りが2,000とか3,000というご時世にだ。」連帯はおれたちを見捨てたってお客様も言つてゐるよ。共産党の時代は「連帯」に駆け込めば何とかしてくれたんだがね。」

ストライキは結局、労働者の信望が厚い聖プリギッタ教会のヤンコフスキ神父が市当局に善処を要請することを約束して、ようやく2週間だけ中止された。労働大臣のヤツェク・クーロンも手伝ってくれる、と神父は伝えた。毎週火曜日の夕方「クーロン大臣と語る」というテレビ番組で政府の諸政策への理解を訴えている彼に対してはいまも労

働者の支持は強いといふ。

「連帯」の現状は以下の数字に象徴的に示されている。組合員の総数は約200万（第1回大会の時は1,000万人）、488名の代議員の平均年齢は42歳（同30歳）で、20代は16名しかなかった。第1回大会では半数を少し超える支持率（55.2%）でやっと選出されたワレサ委員長は、今回の大会では総投票数の82%を超える圧倒的多数で再任された。組合民主主義の徹底を掲げた2人の对立候補はそれぞれ12%、6%の票しか取れなかつた。

2日目、活動報告に立ったワレサ委員長はマゾヴィエツキ首相の名前をあげて、「かつて（1980年の「連帯」結成にさいして）彼らを顧問に迎えたのがそもそも誤りだった」と「連帯」系知識人層に厳しい批判をあびせた。そのうえで自らに対する信任投票を求め、94%余の圧倒的多数の支持票を得た（不信任はわずか1票）。

ワレサ委員長を再選した翌日、国会と大統領の選挙を繰り上げて来春に実施するよう求めた決議が採択された。女性代議員——ちなみに全代議員488名中、わずか44名——から、大統領選出馬の可能性をきっぱり否定すべきだと問われてワレサ委員長は答えた。「なぜかね？ 諸君のレフが大統領になるなんて、素晴らしいことではないかね？ 皆さんを大統領宮殿に招待しますよ。」

最終日、新しい綱領、規約などが採択された。ここで、「連帯」の基本的な性格をめぐって議論が紛糾し、徹夜の討論となつた。あくまでも労働組合としての役割に徹するのか、それとも政党的機能を強化するのかという、「連帯」結成以来の基本問題が問われたのである。結局、政党化は圧倒的多数で拒否されたが、国会や地方議会に「連帯」代表を送り込む必要は了解された。

「連帯」の逆説——多元主義への道？

ピオトル・シュヴァイツェル

Paradoks Solidarności, Piotr Szwajcer
"Po prostu", No. Sygnalny, Styczeń 1990

【編集部注】この論文を掲載した週刊新聞『ポプロストウ』(率直に、の意)は、かつて1957年、そのリベラルな論調のゆえに当時のゴムウカ政権によって廃刊を命じられたが、本年2月、復刊がなった。編集長には、廃刊当时と同じA・トゥルスキが返り咲いた。なお、本論文の著者、ピオトル・シュヴァイツェルについては不詳。〔訳：篠崎 誠一〕

「連帯」とは何か？

社会大衆運動なのか、労働組合なのか、はたまたボーランド人民共和国に「連帯」現象をもたらした理念のことなのか？

それともただ単に、ボーランドにおける共産主義者らの支配に異を唱える反対派すべてを指すものなのかな？

概念の混乱は多面にわたっている。まず、いかなる「連帯」を問題にしているのかが不明である。同時に、1980年、81年の「連帯」と戒厳令から円卓会議、そして今日までの「連帯」には原則上の継続性があるという暗黙の前提に基づき、議論がなされている。あるいはそれが真実なのかもしれない、しかし立証は困難である。名称と指導者たちの同一性——しばしば口にされるもっとも典型的な2つの根拠——はその命題を納得させるものではない。

最近の数ヵ月間でわれわれは、まさにその同じ基盤の上で生まれ大きくなつた数多くの「連帯」内部の対立を目にする機会を得た。これらすべての出来事において対立する双方が「連帯」の過去を現在の政策に関連づけ、手段として利用している。どうも過去に関しては誰もが正しいように見える。しかし現在、かつての「連帯」を形づくっていたひとつの単純な形式はない——そこにある現象と変化の多様さは、長い年月「連帯」の存在を支えてきたものであるだけに、自分たちの論拠を証明するために安易に過去に頼りがちになる。

「連帯」の変質

1980～81年の「連帯」は数多くの名で呼ばれた……社会運動、労働組合、ボーランド（自己限定的）革命、あるいはまた、別の人びとによれば、反革命と。こうした学術用語はともかく、運動の規模の大きさもまたよく話題になった。1,000万の組合員、それは堂々たる数字であり、まさにその参加の規模がボーランド現象を読み解く展望を示していた。しかるに今日、長年にわたる活動にもかかわらず、組合員はおよそ200万を数えるのみになつた。

しかし、今まさにこの時、レフ・ワレサに支持された候補者たちに千数百万人の人びとが票を投じる。この一心は自由な選挙において「連帯」は下院と上院の99%以上の議席を得られよう。ゆえに、「連帯」に対する社会の支持にはなんら疑問の余地がない。ではなぜ、「ワレサの仲間」を支持する絶対多数が彼の組織に加入しないのか？ それは80年の「連帯」と89年の「連帯」の違いのひとつにすぎない。前者について何人かのボーランド人社会学者たち（たとえばヤツエク・クルチエフスキ）は生まれつつあるボーランドの「中間階級」の運動だったと言っている。クルチエフスキの診断が正しいか否かには関係なく、運動の活動家たちが熟練労働者や知識人、技術スタッフの中から募られているということは否定できない。かれらこそが組合に主導音を与え、「カーニバル」

期間の組合の形態を決定していたのである。

ところが、今日の「連帯」、少なくとも大規模な職場におけるそれは、なによりも労働者の組合、それも主として生産に直接携わっている労働者が結集した組合である。われわれが得ている断片的情報からすると、クルチュラスキが言及した「中間階級」はもはや組合の推動力ではない、という仮説が成り立つ。

1980年と比べて、われわれはまったく新しい現象に関わっている。「連帯」は数の上では何分の1にもなり、それが何を代表するかも決定的に異なっている。では第1の疑問から始めよう。隊列への復帰を決心したのが組合員のたった10数%にすぎなかつたのはなぜなのか。

「連帯」を離れた大衆

答えは2つの局面を考慮して出さねばならない。一方には数万あるいは数10万の組合活動家の問題があり、もう一方にはその何倍もの数の「兵隊」——集会と組合費徴収が始まったときに積極性は失せてしまった——の問題がある。後者から始めよう。

思うに、ポーランド人民共和国の最初の30年間の成果は、何よりもまず、労働組合とは「属すべき」組織であるという信念を生じさせたことであろう。こうした空氣の中で労働法も制定され、1979年にポーランド人民共和国に働く人びとのほとんどが C R Z Z [田舎製造業組合労働組合中央評議会]に加入していたことはべつに驚くにあたらない。この独特な自動性は1980年にも機能した、それもより強く。「8月」以後はもはや「かれらの」でなく、「われわれの」組合において。

一方、「戦後」〔戒厳令後〕の経験で人びとは、どの組合に属さなくともまとまること（もちろん、かつてと比べて）働きができるということを学んだ。まさにこの知識が今日、意味をもっている。さらに、過去の例が示すように、組合に加入しているという事実そのものが自分に不愉快な結果をもたらすかもしれない。となれば、かれらがほかの手段、たとえば投票によって、ワレサを支持するようになってしまふに驚くことはない。



連帯、規約より經濟立て直しを！
（連帯 第2回全国大会より）

ほかの問題、1980年に「連帯」が明らかにしたような問題が今日また起こることも予想される。最良の予想のひとつに「12月」前の「連帯」の分析がある。A・トゥレーヌとボーランド人共同研究グループの著作である。それによれば、「連帯」は労働組合（労働者）と社会（市民）、民族という3つの異なる次元での目的を同時に追いかける社会大衆運動と捉えることができる。3つの目的を結びつける構造は同時に運動の参加者個人個人に動機づけを行うものでもあった。

思い起してみよう、多くの社会学者にとってまさにこの「市民」こそが「連帯」現象を横糸のように貫いていたものだった。運動に貢献した著作を数多く著した社会学者の一人にイレネウ・クシェミンスキがいる。彼の著作は、たとえば1985年に書いたものを見ればわかる通り、「市民としての」立場、市民の意味の発見、社会生活の改革——運動の側に立ったものであり、私の考えでは、「連帯」運動の主流を最も端的に表している。

この同じ著者自身、その4年後に、その信念をさらに推し進めてこう述べている——現在、ボーランドで進行中の政治ゲーム、予想しうる（自明でもある）結果が社会の大勝利となるであろう政治ゲームは、どうも場違いな舞台、あるいは場違いな劇場で上演されているようだ。舞台は人びとの「頭越し」に、社会の「頭越し」に設定されたのだ。

1980年には市民の大望は「組合」の形をとて実現した。なぜなら「連帯」と独立自治労組の運動は現実には、そこに参加した人びとのプリズムを通して見る限り、組合そのものなのだ。今日、そうした一体性はない。市民の大望、自由と参加への渴求——それらは今日、組合の外にはけ口が見つかる。そうした知識は、1982~1988年の経験からもさらに広がりを得て、今日では数十万人の人びとの立場と行動の基本になっている。

そのことは、市民委員会の解散を決めた「連帯」全国委員会〔K KW〕決定によってひき起こされた議論の経過を見れば納得できるだろう。そこで用いられた論法は、トゥレーヌがあれほど確信をこめて書いた「3つの目的を結びつける構造」が1回限りの歴史的経験であったことをはっきりと示している。そして今日ではもはやそれが参加者を個人的に動機づける唯一の構造ではないことを——唯一ではありえないことを——示している。その構造は「8月」から「12月」の間、1,000万人の社会運動を方向づけていたものなのだ。

一方、「連帯」の誕生後すこししてから数百万の人びとを「連帯」加入へと向わせた個人的動機の問題は、80年代のポーランド社会の状況とも関係がある。共産党の政策は、のちに「連帯」内部に現われた立場と行動が現実になる可能性をつぶすにある程度の効果があった。この時期について社会学者たちは、「社会的空白」の効果と呼び、一方、時事評論家たちは「望みのない歳月」と名づけた。

それまでこの「空白」に縛りつけられていたすべての人びとを「飲み尽くす」動きが組織されるという独特な状況が発生した。しばしば言われることであるが、「『連帯』の精神」は、まさに自由と参加に支えられていた。当時に生まれたイニシアティブはすべて——平和主義者や環境保護主義者から戦闘員協会に至るまで、教育改革から経済改革に至るまで——ほとんど「連帯」の枠内だけで、組合員の活動を通して発展したと言える。組合とその運動は、少なくともイニシアティブを産み出す人びとの集団として、一体であった。

今日、状況はまったく異なる。「連帯」に対しても最も好意的な見方をする人であっても、かつて

のように、もっぱら「連帯」だけが人びとのために何か新しいものを造りあげる、新しい世界を創造する唯一の可能性を与えると立証することはできない。

さらに、労働組合主義の理念そのものが権威を失墜させている。市民委員会活動家たちに「連帯」の理念に対する共感がないと考えるには無理があるが、そのかれらにしても、労働組合は知識人の居る場所ではないと何度も言っている。その正否はともかく、こうした立場が一般化していることは社会的事実であり、そのことを考慮に入れておかねばならない。その一方で、多くの労働者にとって「連帯」は労働組合であるし、そうあらねばならない。再びその問題に戻ろう。

他の分野をめざす活動家たち

まったく異なる第2の疑問——それはもう1つの活動形態を選択する可能性である。1980年までそうした可能性は現実に存在しなかった。自由と独立と内面の誠実さを維持したければ、出世の可能性は断念しなければならなかった。その状況を変えたのが「連帯」の誕生であった。しかし戒厳令後8年を経て、われわれはまったく異なる新しい社会現象を前にしている。それはこれまで組合を必要としていた人々をばっさりと切り捨て、最高の活動家となりえたエリートのかなりの部分を組合から奪った。ここで私の念頭にあるのは私的部門の発展、海外移住、反対派の組織化と「政治階級」の形成などである。

多数の情報源の裏付けるところでは、かつての「連帯」活動家たちがここ数年間の私的部門の大規模な発展に重要な役割を演じている。あるいはまた、すでに100万以上の従業員を擁するこの部門は、「8月」以後の若い世代を代表する最も活動的な者たちのかなりの部分を吸収しているかもしれない。

2年前、私は若い世代のポーランド知識人たち、当時30~40歳代の人びとを対象とした研究を共同で行ったことがある。2つの研究対象グループがとりわけ興味を惹いた。つまり、個人的イニシアティブにより、自らの計算で経済活動を営む人た

ち、それに「断念者」たち（以前は組合または反対派で活動していたが、われわれが研究対象とした時点ではその活動を継続していない人びとをこう定義した）である。そして研究対象のかなりの部分がこの2つの規準のどちらかを満たしていたのだ。しかしまーと興味深いのは、みずから独立性を確立して維持し、自分自身でありつけたいという動機はこの両方の活動タイプ（経済活動と反対派=組合活動）に共通してあったことである。

さらに、まさしくこの双方の一致した動機が一方から他方への移動をかくも安々と（しばしば）行うことを可能にしたのだった。多くの「断念者」たちにとって私企業の経営はこの価値観と原則の実現に結びついていた。立場と見解について見る限り、ホーランドの現実と求められる変化の方向性に対する見方はこの2つのグループの間で相違はなかった。そして、この2つの集団を代表する人びとは、同様に研究対象に含まれていた反対派活動家たちよりも、しばしば急進的できあつた。

80年代はまた、国内の社会状況をすっかり変えてしまったもう1つの現象——海外移住——を産

み出した時代でもあった。この期間に（最も慎重な評価に従っても）少なくとも数十万の人びとがポーランドを後にし、その中には多くの組合員がいたことに疑問の余地はない。私の知る限り、たとえば第1回全国大会代表の半数以上とK K P〔「連帶」全国委〕のかなりの部分が出国した。これは確かな規準に基づいており、海外移住現象の研究者によって確認されている。そしてこの海外移住が連れ去ったのは、最も活動的で最も精力に満ちた部分だったのである。

最後に第3の疑問——それはホーランドの政治地図の1要素としてずっと存在を続けた反対派の現象である。ここでその政治的意味合いについて述べようというわけではない。重要なのは、それがこれまでになかった行動規範をもたらす社会グループとしては比較的大きく、目立つ存在であるという点なのだ。それは実際にはすでに70年代に存在していた、しかし社会の世論として重要性をもったのはようやく戒厳令導入のことである。今、われわれの目の前で——あらゆる文明化された社会にとって模範になる——ホーランドにおける「政治階級」が形成されているのだ。



土管に書かれた
平和
— 5月一日
の文字

fot. JAROSLAW STACHOWICZ

もう1つ、問題を思い起こす必要があるかもしれない。「8月」のあと、運動の根本的部分は民族の同一性の擁護と独立の獲得をめぐって発展した。この活動は主として象徴的な領域において、たとえば民族の歴史の官製版を否定することと結びついていた。80年代半ばに始まった十分に賢明な共産党の政策が、「連帯」のもう1つの強力な切札を奪い去った。この時期における検閲の自由化を見事に示した実例が、大量に出版されて国立書店の書棚を埋めた「カティン名簿」であった。同様にそれは他の——民族的、歴史的分野以外の——生活の分野にも影響を与えている。

戦闘的な青年活動家はどこへ

これまでに述べた仮定では、もちろん、なぜ「連帯」がいまやたった200万の組合なのかという疑問に対する答えにはならない。私の考えでは、驚くほど組合員数が少なくなった原因の1つは、組合を創り出し、そして継続の保障となった人びとが今日の組合の形態に失望していることである。要するに、かれらには現在の「連帯」に居場所がないのだ。

例として1988年の出来事を振りかえりながら今日の組合を見てみよう。その年の5月と8月、わが国をストライキの波が襲った。すべてのストライキ職場でいくつかの「連帯」設立委員会が生まれた、あるいは活動を再開した。そしてたまたま、「『連帯』の春」というスローガンが人気を博し、ストライキ報告では「もう1つの8月」という定義が優勢を占めた。

われわれは、ボーランドの現実における集団的、社会的な主役としての「連帯」の存在を明確にする宣言と出会った——組合の再生、あるいは不变の存在、どう言おうとそのことは重要ではない。ストライキに参加した労働者、それが要するに「連帯」なのだった。それは、かれらが——無論かれらだけではないが——この運動を創りあげたのであり、今もそれは議論の余地のない社会的事実なのだ。

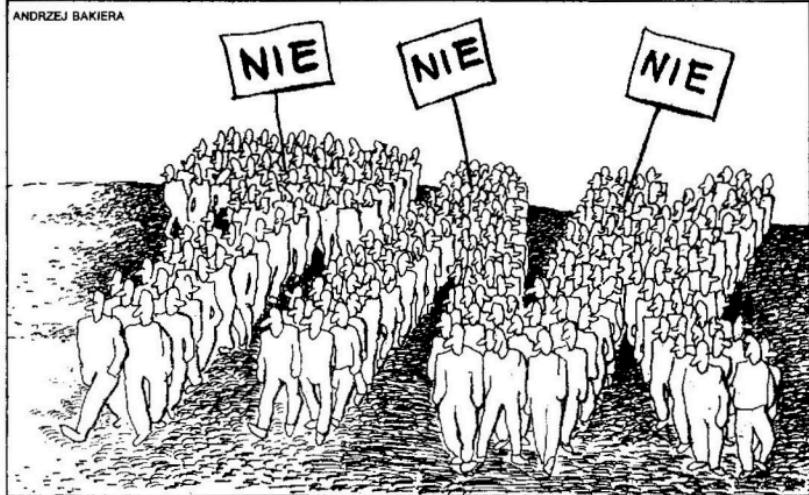
ところで、今、あのストライキの英雄たちの身に一体なにが起きているのだろう？ アンジェイ・

シェチュヴァニエツ。ノヴァフタ製鉄コンビナートのストライキ組織者で指導者。彼はPPS〔ボーランド社会党〕を去った。スタネツキ。グダンスク造船所の5月ストライキの首唱者。彼は組合に加入しなかった。ストライキがいちばん長く続いた職場（シチェチンのWPK）の2人の指導者は西独に移住した。同じようなことが、去年の事件に参加して少しでも名の知られた人びとの多くに起きていた。たとえばグダンスクのSD〔民主党〕グループ、まさに1988年8月に生まれたこのグループの活動を、ワレサの「漸進」路線と結びつけるのはかなり無理がある。

当時、最も目立ったグループは若者たち、1980年にはまだ学校に通っていたかれらである。まだ人生が安定していないのがふつうのかれら、独身のかれらには家もなく（また、家を持てる展望もなく）、しばしば非常にこみ入った履歴を持つ——かれらは戒厳令下で大人の生活に入ったのだった。かれら自身、自分たちのことを「戦争世代」と呼んだ。デモと「吹雪」——長時間にわたる、日常茶飯事となった警察やZOMO〔機動部隊〕との非常に激しい戦闘——それがかれらにとっての社会活動の学校だった。

かれらの罪ではないのだが、かれらの社会意識は、非常に厳しい社会分裂、絶対に言い逃れのきかない道徳的葛藤、そして憎悪と結びついた強権——こうした世界観によって形成された。かれらは年上の仲間とは異なるカテゴリーで物を考える。「連帯」の理念とつながりを持つ諸価値観を実現するため、かれらには多くのものを犠牲にする用意がある。「連帯」の理念を理解しようとするとかれらなりの、まさしくそのやり方が、再合法化された組合において求めることのできるものとの食い違いを生み出す。

5月と8月のストライキのスローガンは「『連帯』なくして自由なし」であった。組合法化の要求は実際にすべてのストライキ参加職場に現われ、ある時からそれは第1の要求項目となった。どのような「連帯」なのか、そしてどのような自由なのか——それは、われわれの研究へ参加してくれた人びとにわれわれが聞いた最も重要な質問の1つであった。



人文字は TAK (イエス) の形を描いていますが、
突き出たフラカードには NIE (ノー) の文字

ここでは「連帯」という言葉は明らかにいくつかの意味を部分的に隠して登場する。「連帯」は……引用符つきで、大文字で書かれる。何よりもまず運動として認められた。抗議運動、当局に対抗する運動ではあるが、しかし労働運動としてはない。この3番目の用語はむしろ自分たちの呼び名として現われた。われわれの組合、それこそ真の組合であり、「かれらの」組合、何ひとつまともな仕事はせず、なんのためにあるとも知れない、そのためにそもそも存在さえしないあの組合に対抗するものだ。

この対抗はしかし、より広い範囲で抗争のもととなる。一方の側には労働者、そしてその反対側にはほかの全員——企業の最下位レベルの管理部門から始まり、共産党员の指導者に至るまで——がいる。職場を分裂させている障壁（少なくともストライキ前の時期にはそう見えた）は考えうる限り最も低い水準へ後退した。すでに職長は「かれら」の側に属していた。日常的な無視と軽視——それが幹部要員の労働者に対する態度なのだ。

に対して労働者たちは嘲笑、および（または）憎悪で応じた。それゆえに「連帯」規約には純粹

に労働者の運動でなければならないとあるのだ。

まさしく、労働者であることはわれわれの回答者にとって中心的なカテゴリーであり、それをめぐって個人的・社会的一体性が組織されたのである。労働者であることはまた、倫理のカテゴリーでもある。われわれの回答者たちは、ただ労働者だけが国内の変革を求めて効果的に闘うことができ、労働者だけが真に労働を望んでいると考えていた。ホーランド人として、そしてホーランド社会において最も一かれら自身の考えでは、恵まれないグループとしての労働者。かれらは自由と尊厳と「連帯」のために闘った。「連帯」をかれらは、自分たちを取り巻くすべての悪に対する最後の治療法であると考えていた。

かれらの闘いがたたうわべだけ勝利に終ったことちまた不思議ではない。ストライキ指導者たちの中できえも、アロイジ・ヒエチシクとシロンスクの活動家教人だけが円卓会議の席に着いたのだった。あとの者たちは、はっきり言って、当局との間の妥協によってできあがった新しい現実の中にみずから居場所を見つけられなかった、そして今なお見つけられないでいる。なぜなら、妥

協という考え方そのものをかれらは放棄しているからだ。

しかし、思い出してみよう、ほぼすべての職場で行われた企業長との交渉でストライキ参加者がどんな反応を示したかを。典型的微候を示したのが、8月ストライキを終結させる決定を下したワレサに対するレーニン造船所労働者たちの反応だった——若い造船工のグループによるデモンストレーション、スローガン、その時のスローガンは「レフ・ワレサは肉の塊」等々だった。

さらに思い出すべきものがある。ワレサと「5月宣言」炭鉱の坑夫たちとの会合。それに、「連帯」議長がもう何日も続いているストライキを終らせようとして出くわした恐ろしい困難である。ビエチシクがペウハトフの鉱山地帯で始まったストライキを終結させようと出かけた時はまだ少しはましだった。その時にはもう円卓会議は始まつていて基本的な合意内容はすでに知られていたのだから。

妥協と漸進の路線には——「連帯」組合員と支持者たちの中に——多くの敵がいた、かれらはみずから異議を唱えることでまさに「連帯」の理念への呼びかけをしていたのだった。それは、なんなく、弁護士シワノヴィツキが選舉運動中にかれらに向かって言ったことであった。かれは、自分は「連帯」に属するのであってワレサに属しているわけではないと明言したのだ。各地方やボーランド各地の大都市（ワルシャワ、シチェチン、グダンスク等々）で生じた各地方本部や組合幹部との対抗関係もまたこの内部対立から派生したものだった。

このすべてと関わりのあるのが、現在の組合指導者の合法性を土台からゆるがす、軽視できない問題である。これらの内部対立は「連帯」の組合員数に影響を与えるほどのものではないように思えるが、しかしそれが組合の状況においても意味は無視できない。

階級意識の変化

最後に、前述したトゥレースの著作に戻りたい。彼は「連帯」を階級という範疇の中で分析してい

るが、そのわりには1980～1981年の運動の現象についてよく書けているように思える。ところがそこに示されている分析は明らかに1989年のボーランドの現実に届いていない。もしかすると、ほとんどすっかり「階級」分化した社会構造——ほとんどすべての人が雇用者である国家の雇われ人——が存在したがゆえに、1980年のボーランドに階級的性格の全社会的な運動が起きたのかもしれない。

私の述べたボーランドにおける社会変革は80年代にはかなりの程度までこの階級体制を保っていた。運動に加わった人びとに共通する階級意識について今なにかを言うのはむずかしい。

ここで触れておかねばならないが、労働者階級の意識には2つの形態がある。1つは職業に対する価値観に関連した階級の誇り、もう1つは不遇感によって作り出されたプロレタリア階級意識である。心配なのは、1980年と異なり、今日、ボーランド人が「連帯」に加入するいちばんの原因が、集団的および個人的差別感の共有なのではないかという点である。そのことは組合に守りの姿勢をとらせ、権利を主張する立場を放棄させる。そのうえ、行動能力はかなり限られるようになり、自分の職場、あるいは広くてもせいぜい自分の属する職業グループという狭い範囲内でのみ考える方向に傾く。

しかし、もしかしたらこの決定的に——1980年の比較で——弱くなった組合の地位とその「普遍的」性格の崩壊は、かつては想像もつかなかつた政治と社会の改革の速さとあいまって、全体主義から社会生活の真の多元主義への移行を推し進めるとたない現実的チャンスを提供するのだろうか？



「小默示録」の世界

タデウシュ・コンヴィツキと語る

Enchanted Places; A Conversation with Tadeusz Konwicki
Gazeta International, Issue 8-9, 26 April 1990

【編集部注】 タデウシュ・コンヴィツキは現代ポーランドを代表する作家。1926年、当時ポーランド領であったコロニア・ヴィレンスカ（現リトアニア領）に生まれ、大戦末期の1944年7月から6ヶ月間バルチザンとなって戦う。ソ連軍に敗れて現在のポーランド領へと逃走、戦後早くから文筆活動を始めた。作家活動のほか、映画脚本や演出も手がけている。小説「ぼくはだれだ」（1969）が1975年に品文社から、「ポーランド・コンプレックス」（1977）が1985年に中央公論社から、それぞれ邦訳出版されている。「ポーランド・コンプレックス」には巻末に作者インタビューも付されているので、あわせてお読みいただくことをおすすめする。また、以前岩波ホールで上映されたA・ワイダ監督の映画「愛の記録」には、原作者コンヴィツキが謎の老人役で出演している。なお、このインタビューはポーランドの英語版週刊紙『ガゼータ・インターナショナル』に掲載されたもので、聞き手は同紙編集部のヨランタ・コサク。

〔訳：高橋 初子〕

問 あなたの作品「小默示録」を演劇化したものを見たが、1年前に上演されていれば良かったのにと思いました。1年前であれば、上演は政治的声明にならったでしょうに、今では寓話です。上演がこんなに遅れたことは残念ではありませんか？

コンヴィツキ 飛行機のキップは決められた期限を過ぎると使えなくなるけどね、本をそれと一緒に考えてはいけない。本を政治的声明になぞらえても詮ないことさ。もちろん、本にはそれぞれホットな時とそうでもない時とがある。

問 「小默示録」のなかで、「この都市は、無へと蒸発しつつある国民の首都だ」と書いておられますか。それを書いた時の意図と、この命題に関しての今のお考えをお聞かせねがえますか。

コンヴィツキ あの本は一種の警告として、当時国で起きていたことへの一種の感情的反応として書かれたものだ。だから文面を文字通りに受け取ってはいけない。

でも君がしつこく聞くから、今まで誰にも言ったことのない話を聞かせてあげよう。つまり、小

默示録はここで、われわれの住むこの世界、ヨーロッパの中のこの地点で、何度も何度も繰り返されるはずのものなんだよ。

問 すると、この都市、この国民、つまりわれわれ自身に関して、あなたは蒸発に関するあの文章が今でもあてはまると思っていらっしゃる？

コンヴィツキ どうしてポーランド人でここに暮らしているこの私が、われわれ自身の地上からの消滅を望んだり、好きこのんで予言したりできる？ そんなことはばかげている！ 君はある文章を文脈から切り離して取り上げている。あれは、いろいろ考え込んだ末に、感情的状態のなかで過激な結論に行きついた主人公の台詞だ。創作上の登場人物に尋ねるようなつもりで、作者に、意識の流れの特定の一部分を正しいと支持しているかどうかを尋ねることはできないよ。その質問はデマゴギー的だ。

問 それでも私は、あの哀れな台詞を、あなたの恐怖の表現、この本全体を構成している具体的的事実に基いたもの、と理解しています。「小默

示録」は蒸発についての小説ですが、それとも違っていますか？

コンヴィツキ 蒸発についての小説だ。

問 それならばもう一度お尋ねします。蒸発の過程は止まりましたか？ 方向転換しましたか？

コンヴィツキ その質問は時間の無駄だね。なぜなら君は、その過程が既に、幸いにも、方向転換したのを目にしているのだから。人々は目覚め、生気を取り戻した。彼らはきっとまたつまづくだろうし、たくさんの間違いもしでかすだろう。しかし彼らは自分の2本の足で立っているんだ。

問 それは、われわれが既に完全に自由だということですか？

コンヴィツキ われわれは1年前の円卓会議の時にもう自由だったさ。私はあちこちで、われわれは自由だ、ただそれに気付いていないだけだと皆に言って回った。私は言ったのさ、われわれはシェンケヴィチの小説「大洪水」の登場人物ザグウォバみたいなものだ、と。ザグウォバは敵軍の旗が身体に巻きついただけなのに捕まったと思い込み、「放せ、この野郎」と叫びながらもしな

い相手に向かって軍刀を振り回す。彼は自由なのに、それを知らないだけだ。われわれにもそれがあてはまる。体制は前から崩壊していた、体制は自殺を企てようとしてきた。われわれだけが——ちょうど定期的に決まった相手と闘ってお互いのトリックを知り尽くしているボクサーみたいに一一以前どおりに闘い続けたのだ、権力が拾い上げられるのを待っている状態になっているのも知らずに。

問 われわれを救ったものはなんでしょう。もしかして、われわれのユーモアのセンスでは？

コンヴィツキ スラヴ人にユーモアのセンスがそもそもあるかどうか、私は確信が持てないんだよ。私の言う「スラヴ人」は、民族的なものよりもむしろ地理的なものだ。ヨーロッパのこの地域とロシアでは、（ユーモアと自己を皮肉る才で有名な）エコ人を除けば）、われわれはユーモアのセンスがあるという証拠を示せないことしばしばだ。それに、ロシアやポーランドでユーモアが価値あるものとみなされているかどうかかも、私には確信がない。しかしその一方、ポーランドという国はヴィトカツィやヴィトルド・ゴンプロヴィチを生ん

「小黙示録」はコンヴィツキが1976

年から77年にかけて書いた小説で、79年に出版された。舞台は1980年のワルシャワ、主人公は自分自身のこと以外にあまり関心のない中年の作家である。ある日彼は運命の天使たる2人の作家仲間の訪問を受ける。2人は、その当日公式にポーランドがソ連に併合されることへの抗議として主人公がワルシャワ中心部の文化科学宮殿前で焼身自殺をしてみせるようにと言いに来たのだった。この提案は実は反体制文学者たちの討議の結果決定されたもので、彼はいにえ役として民主的に選出されたことが明らかになる。

「小黙示録」はこの主人公の“十字架への道”である。彼が運ぶ十字架、それはガソリンの缶

と、外国人向けドル・ショップで苦労の末に入手されたスウェーデン製マッチ。主人公は自らをいにえに捧げるというこの話に全く気乗りせず、宣告を受け入れた後も、運命から逃れようと試みる。姿を隠そうとし、ガソリンとマッチを置き去りにしようとするが、秘密警察をはじめとする善意の人々が必ずガソリンとマッチを彼のもとへ返しに来てくれる。

主人公は地下へ行き、ワルシャワのポーランド色を根絶するためにやって来たソ連政治家を賓客とする晩餐会に行きあたる。ポーランドではかつてみられたことのない種類の晩餐会。

地上に地獄、地下に楽園。人々は正しいことと誤ったことの区別がつかない。主人公はいやいやながら、この世界の終末へ向かって歩いてゆく。

だことも忘れてはならない。これは、われわれがある意味で、世界を一定の距離を置いて眺める素因を持っているということだ。私自身にとっては、ユーモアのセンスは単に欠かすことのできないピタミンだね。

でもね、われわれはこの半世紀のポーランドの経験も忘れてはならない。われわれは実際この地上で最悪のものごとを経験したよ、現存社会主義の時代も含めてね。現実の社会主義はわれわれの生活を不条理の支配する領域に導いて行き、あまりにも劇的な状況を作り出してしまったので、われわれがそれに対して取りうる反応といえば笑うこと以外になかった。

問 笑いは奴隸にとって武器です。あなたの言われる笑いもその種の笑いではなかったでしょうか？

コンヴィツキ 安易なレッテル貼りは私の趣味じゃない。ユーモアのセンスの話をしよう。ユーモアのセンスはわれわれが生きてゆくことの困難さを減らしてくれる。なぜならそれは距離を置くことを教え、ヒステリーや狂信に陥らぬようにしてくれるからだ。ユーモアはわれわれの行動を適度に抑えてくれる。私自身についていえば、わが国民の生活のなかの難しい問題を扱って書く時、ユーモアのセンスをはさみ込むことで読者の負担を軽くするように常に努めている。ユーモアは不愉快な真実に触媒として作用し、望むらくは読者に、彼らの日々の生活のなかの様々な問題に対する健全な距離感を感じさせる。

問 そしておそらく作家に対しては、自身を困らせるものごとを語りやすくする？

コンヴィツキ 君もひどく疑い深い人だねえ。君はまだ、私が何かを使う時、それは必ず誰かをだましたり、からかったりするためにだと思っている。君にはわかっていないんだ、私がいかなる因襲にも決して従うことができない、とりわけ深刻さっていう因襲には、っていうことが。まして、莊厳さの因襲や、ポーランド文学の顕著な特徴たる伝道師的作家の因襲にはね。私のユーモアは、私の気の短さ、私の性格、私の無謀さのなせるわざだ。



それに、私は読者のことが好きだ——少なくとも理論的には。つまり私が想像するところの読者像というものを好きなのだ。だから彼らを楽しませようとするわけさ。

問 ポーランドの作家の作品は外国の読者をも楽しませることができるとお考えですか？ ポーランド文化のうち、どのくらいの部分が外国で理解されるとお考えですか？

コンヴィツキ ポーランドで生じるものごとは何であれ理解されるし、されねばならない。何しろ人類の可能性というのはごく限られたものでしかないからね。インドや南米やイギリスで起こり得ないことは、ここポーランドでも起こらない。人々は生まれ、恋に落ち、憎み、権力や支配をめざして戦い、失敗し、病気になり、死ぬ。人生はどこでも同じさ、ひとつ制限はあるけれどね。つまり、ここで暮らすわれわれの人生は裕福なブルジョワ社会の生活と比べて、極めてドラマティックだという点で異なっている、ということだ。歴史はわれわれに厳しかった。だからわれわれは世界から見ていくらか理解しがたく、いくらか受け

入れにくい存在かもしれない。人間は素敵で楽しい話を読む方が好きだからね、人間の運命の苛酷さを思い出させるような話よりも。

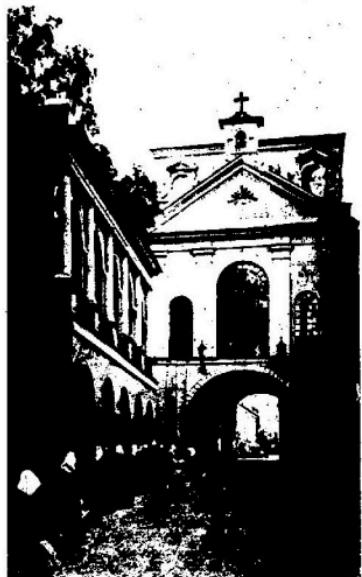
そういうわけで、「私の考えではポーランド文化の大部分は一定の条件さえ満たせばポーランド以外の世界にも理解されうる。世界は強い者に、とりわけ脅威を与える者に心を抱く。誰もがロシアの「爆弾」を恐れているから、ロシア文学はポーランド文学に比べて世界に受け入れられるチャンスがずっと大きい。」

同時に、もうひとつ触れねばならない問題がある。一番翻訳しやすいものは何か？ 陳腐なもの、ステレオタイプ、パターンだ。これらはどこでもまあねく理解される。だから、最も世界進出のチャンスの大きい作品は二流品だ。異質なものに興味があると広言してはばかりない西側の田舎者たちも、実際のところは、自分たちと同質なものを見る方を喜ぶ。誰でもだ。文化についても同じことが言える。

例えばだ、私はポーランドの偉大なロマン派詩人ミツキエヴィチの非視覚的詩劇に基づく映画を作った。ミツキエヴィチは極めてポーランド的な人物だ。作った時、私はその映画は非常にポーランド的で、翻訳不可能だと頭から信じ込んでいた。しかしその後、俳優のホロウベクと話したら、彼はこう言ったんだ。「自分が普遍的で理解されうるかどうかをチェックするために絶えず索引や辞書をあさりまわるより、ポーランド的なものをとことん突きつめて、反対側へ突きぬけて、そこで理解されるようになるっていうのは正しくないかな？」。

問 ミツキエヴィチの「父祖の祭」を基にしたその作品「溶岩」には世界へ向けての道が開けそうですか？

コンヴィツキ 「溶岩」はいささか困難をかかえている。というのは、「父祖の祭」はそれほど多くの言葉に翻訳されていないし、翻訳されているとしても断片だけだからだ。さらに、全訳されている場合でも、その翻訳はしばしば非常に古かつたり、貧弱だったりする。「溶岩」は難しいスタートを切ったといえる。



リトアニアの首都ヴィリニュスの「オストラ・ブリマ」

しかし、私はもともと「溶岩」が国際的に大きな成功を収めるとは期待していなかったけれど、いくつかの明るい兆しも見える。ポーランドを訪れた西側の映画評論家グループが「溶岩」を見た。私はこの作品でポーランド人の心理的肖像画を描こうとしたのだが、彼らはこの作品が理解可能であり、ポーランドに関する知識の幅を広げてくれた、と評したんだ。「溶岩」は華々しい登場を飾るとは思わないが、——私自身の人生の大きな部分がこの映画の中に描かれているし——、願わくば徐々にでも理解され、世界に受け入れられれば良いと思う。

問 ありがとうございました。もう私の方からの質問はありません。

コンヴィツキ ちょっと待った。君はまだ私に何にも聞いてないじゃないか。一番大事な質問をしていないよ！

問 どういう質問ですか？

コンヴィツキ 文学について、リトアニアについて。

問 ではリトアニアについてうかがいましょう。
コンヴィツキ リトアニアのことを話すときは、いわゆるポーランドの「クレスィ（国境地帯）」について言わねばならない。ポーランドは、東隣以外の国々とは国境で接しているが、東だけはいつも「クレスィ（国境地帯）」と呼ばれてきた。この呼び名はいささかのロマンティズムを含んでいる、空間的な感覚や、精神的・感情的な感嘆の感覚を。「クレスィ」はヨーロッパをアジアとへだて、ラテンをギリシャとへだて、カトリックを正教とへだてる土地の名だ。ポーランドの最も興味深い現象がこの地から生まれた——かつてポーランド精神に極めて深い影響を与え、今も影響を及ぼし続いているポーランド・ロマン主義も、政治思想も、習慣も。

ポーランドのユダヤ人はクレスィから世界へ向けて旅立ち、アメリカ中に広がり、その技術と発想とで世界の文化を豊かにすることに貢献した。クレスィは、人種のるつぼであっただけではなく、宗教や習慣のるつぼでもあった。リトアニア人も、ポーランド人、白ロシア人、ウクライナ人、ユダヤ人、ドイツ人さえもそこに住んでいた。

その地域はもはや存在しない。戦後の変化のためだ。クレスィは領土も行政機構も制度的組織も持たない。それは思い出の地、あるいは想像の地となってしまった。今日、クレスィは世界の注目を浴びている。この問題についての会議がいくつも、世界中の専門家（歴史家、文学史研究者、社会学者ら）を集めて開かれている。彼らはクレスィの心理的事象について議論している。その心理的事象は今も存在し、不思議な知的、文化的、伝統的、哲学的な美によって人々を引きつけ続けている。

問 その事象の中にはあなたご自身の場所もある。

コンヴィツキ 私はあの世界に生まれた。いわば19世紀に生まれたともいえる。あの地域には19世紀がある種の形で残っていたからね。あのバルト海の東の隅、西ボモージェからエストニアへ至る湖沼地帯ほどに文明が遅れて到着したところなど他になかった。その場所は氷河の端を形成してい

た。たった7000年前にヨーロッパを離れて移動してきた氷河の。だからそこは魅せられたる場所だった。私は魅せられたる地域で、様々な言語を話す友人たちに囲まれて育った。私はイースター（キリスト教の祭）も過越しの祝い（ユダヤの祭）も正教会の祝祭も、その他あらゆる種類の祭日を祝った。そして、あのヨーロッパの片隅の住人に典型的な運命を体験した——軍隊がやって来る、通り過ぎる、占領する、敗走する——。絶え間なくそんなことがあるように見え、私は少年期に十分すぎる程にそれを見た。そしてその後は、私の世代の人間、つまり思春期が戦争とぶつかった人間がぐぐりぬけたことすべてを経験した。

問 あなたはヴィルノのバルチザンとともに戦われた……

コンヴィツキ そう。ドイツを相手に短期間、そのあとはロシアと戦ったよ——長いことね。

問 戦後はポーランドへ移って共産党に入党されましたね。これは私にとって全くの驚きです。強制されて、あるいは説き伏せられて、威圧されて入党したとは考えられません。自分の意見でそうされたに違ひありません。好きだったのですね。コンヴィツキ もちろん好きだった。ユートピア的社会主義は今でも大好きだ。知的側面で右と左のどっちか選ばなければならないと言われたら、私はいつでも左を選ぶだろう。私は、嘲笑されるような進歩を支持している。保守主義には、維持する、あるいはしまっておく、保存する、といった意味あいがある。そんものは馬鹿げているよ。われわれがどこへ行くかは誰も知らない、しかしされわれわれは前へ進む動きに合わせて行かねばならない、それがわれわれの内なる命令だ。だから理性主義はいつも私にとって魅力的だ。

私が社会主義でヤケドしたっていうのは本當さ。私は欺かれていたが、すぐにどういうことをすべて悟った。おそらく社会主義の理念は実現不可能で、いつまでもユートピアとして留らざるを得ないものであり、大いなる自然が人間に授けた動物的本能を克服することはできないのだろう。人間はつねに物を所有したがる、自分で、自

分のために。そして他人から奪いたい、支配したい、抑圧したいと望む。それに対して私は、私のようにナーブな人間は、ある一般原則に従う方が好きなのだ。つまり、もしも共同のドアの蝶番がはずれたなら、自分個人専用のドアを持とうとしたりせず、共同のドアの方を修理すべきだっていう原則だ。君がひどく驚いたっていう私の過ちもそこから来ている。

問 しかしあなたは党を去りましたでした。追放されたのでしょうか。

コンヴィツキ 私がコワコフスキ教授を支持したっていう理由で、連中は私の名前をリストから消したのさ。

問 それはつまりあなたが強い疑念を抱いていたということですね。それならなぜご自分から離党なさらなかつたのです？

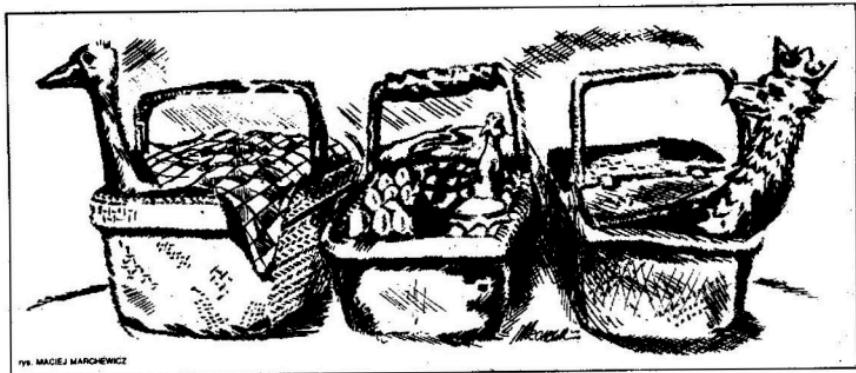
コンヴィツキ これから私が言わなきゃならんことは、君たちの世代には非常に理解しにくいことだ。名誉について、君に話さねばならない。ボーランド人はつねに名誉を非常に尊んできた。名誉の感覚は君も受け継いでいる、あるいは遺伝子の中に持っているよ。私が自発的に参加した団体から突然ヒステリー的に飛びだすのを押しとどめた

のは、まさにその名譽の感覚だった。

問 それは、名譽とはあなたご自身の過去の決定に忠実であることだ、という意味ですか？

コンヴィツキ こう言おうか。男の名譽と女の名譽とがあるんだ。男の名譽ってのはより美的で、より渋いものなんだ。この問題を説明するのは非常に難しいから、かわりにアダム（アダム）・ミフニクと彼の精神（エーストス）の例を引こう。アダムは——自覚的にかさにあらずか——般に名譽と結びついている価値を実践している。かつて体制がカトリック司教会議の同意を取りつけ、獄中にあった反体制指導者たちを5年間の国外追放処分にしようとの方針を決定したときに、もしアダムがその方針どおり交渉のテーブルについていたなら、われわれは現在ブレジネフ時代やチェルネンコ時代と変わらぬ状態でいただろう。あのときは、司教たちも反対派の“上層部”も、皆がイエスと言った。だがアダムは監獄の独房から出ようとせず、交渉に応じようとしなかった。もし彼が違う行動を取っていたら、ベルリンの壁の崩壊も、チェコスロバキアの「ベルベット革命」もなかつたろう。

アダムが独房を出て交渉しようとしたおかげで、彼の友人たちも【自分たちの行動を】恥



じ、当局との交渉を打ち切ってしまった。そして後はご存知のとおりだ。

問 国について、名誉について話してきましたが、次に神についてすこし話していただくわけにゆきませんか？

コンヴィツキ 私のことを知つていれば、私がその問題を論じたがらないことくらいわかっているだろう？ 今日のポーランドではその問題が仰々しく扱われすぎているように思うね。主に楽観主義あるいはある種の突発的動機によって論じられている。この問題は個人個人と神との相互関係のままに放っておこう。かわりに文学について聞いてくれたまえ。

問 あなたは、生涯で最も重要な作品というのを既に書かれましたか？

コンヴィツキ 友人たちのインタビューを読むと、彼らはしつこくまとわりつく「書くべきものごと」という重荷にとりつかれていて、彼らの主たる関心事は死ぬまでにそいつを書き終えることだっていうのがわかる。私は、書くべきことを何も持たない数少ない者の1人だ。なぜ私には書くべきことが全く、あるいはほんの少ししか、ないのか？ なぜなら、既に書かれたことのあるものごとを繰り返す気になれないからさ。昔ながらの劇のパターン、昔ながらの観察、古代ギリシャの昔から何千回となく示されてきた同じ知恵のかけら。私は、いろんな次元の境界をかすることで、何か新しいことを発見できるよう強く願っている。例えばわれわれの人生とは何かとか、この世界における——実際あまりにも奇妙でありにも苦悶で屈辱的な——われわれの無為なる生活の意味は何かとか。

問 すると、凡庸さは内容の中にあり、その実行の中にはあらず、と信じていらっしゃる？

コンヴィツキ そうだ。内容の中にある。われわれの存在そのもののなかに、何とも恐ろしく、何とも理解しがたい存在のなかに！ 君が知らないことを、何でもいい、君に言ってやれたらどんなにすばらしいかと思うよ。例えば、ある科学者た

ちは宇宙が有限であることを発見した。これはまさにエキサイティングなことだ！

私はもっと多くのことを知り、自然によってわれわれに課された限界を越えたいと思うよ。そうなれば私はそれを、人々に伝達するに値することと考えるだろう。もし何かを感じ、何かを予見でき、何か新しいこと、これまで地上の誰一人知覚したことのないこと、われわれの存在を説明してくれるなどを観察できたなら、その場で死んでもいいね。

私は物語作家じゃない。私は仲介者でありたい。しかし同時に私は極端に用心深い。私はいつでも、わが貧弱なる散文をもってものごとを示唆し続けているが、私は用心深くあることを学んだ世代に属しているんだ。何かを権威ありげに広言したり押しつけたりすべき根拠を、私は持たない。できることといったらしさやかなほのめかしをすることだけさ。最後の瞬間までうろちょろとし続け、知りたがり、暗闇の中をあてずっぽうに探針で探りまわるのが私の運命なんだ。



ny. JACEK RUTKOWSKI

カエルを食べればフランス型地方自治モデルに近づけるっていうんだ、いやでも食べるけどなあ

【2頁から続く】

シェフスキ外相、リスボンでゲンシャー西独外相と会談。

3月25日 マゾヴィエツキ首相はニューヨークで米国ユダヤ会議代表と会談、ソ連のユダヤ人のイスラエル移住の際、輸送の便宜をはかると約束。●3月の世論調査の結果、マゾヴィエツキ首相の支持率は89%（前年11月は95%）、ワレサ支持率は79%（同93%）。

3月26日 ワレサ路線は80年8月の理念からの逸脱だとする新労組「連帯80」が、暫定全国評議会を設置。マリアン・ユルチクが議長に。

3月27日 マゾヴィエツキ首相カナダ訪問。マルルニー首相と経済関係緊密化やドイツ統一、ソ連問題などについて協議。●市民議会クラブ代表団（ゲレメク議長、ウエツ、オニシキエヴィチら）がリトアニア訪問、ランズベルギス・リトアニア最高會議議長や「サユディス」代表団と会談。●ワレサ委員長はゴルバチョフ大統領に書簡を送り、リトアニアへの軍事圧力をやめて話し合うよう求める。

3月29日 国営PAP通信は今日から一部物品の関税引き下げと報じる。例えば税率40%だったテレビ、ビデオ、ラジオ等は12%に。

3月30日 ソ連のユダヤ人の移送にポーランドが協力を表明（3月25日の項参照）したことにより、ペイルートでポーランドの貿易組織代表大妻がアラブ人抵抗組織に狙撃され負傷。●コール西独首相、ポーランド国境の不可侵を強く保証する発言。

3月31日 ドイツ統一を協議する4カ国会議へのポーランドの参加（ポーランド関連事項が協議される時のみ）に関し、モスクワはポーランド参加を支持するとの書簡がマゾヴィエツキ首相に送られる。●「連帯」代表と政府代表が会談。ワレサ委員長は「経済改革のテンポが遅すぎる」と改革スピードアップを求め、一方マゾヴィエツキ首相は「改革は正しい方向に向かっており、来たる地方選挙、資産改革、内務・国防両省の行革などでさらに状況は好転する見通し」と述べる。

4月1日 各地でカティン事件50周年の祈念ミサ。●ZBOWID（自由と民主主義のための戦士の同盟=旧体制寄りの退役軍人会）が「ポーランド共和国の戦士と元政治囚の同盟」に改称。

4月2日 内閣は90年の外交政策を討議。西側との関係強化と、対等な立場での対ソ関係を強調。チェコ、ハンガリーとの関係緊密化も特に言及される。

4月3日 ソ連当局、リトアニアとポーランドの国境



「カティンに間違する眞実」と書かれた書類を
ヤルセラフに渡すゴルバチョフ……。

を封鎖。（後に閉鎖は一部解除される）。●新任の国防次官（複数）に初の文民としてオニシキエヴィチ前「連帯」スポーツマン、A・ハル前無任所相、B・コモロフスキが任命される。●PAP通信、ポーランドが国際刑事警察機構インターポールに再加盟を申請と伝える（ポーランドはスターリン時代に脱退していた）。●「連帯」全国調整委員会の会合でワレサ委員長は再選出馬を表明。

4月4日 「連帯」、政府両代表団の討議。雇用政策、失業、賃金、私有化と組合の関係などを話し合うが、特に失業手当をはじめとする数点で両者の見解が相違したと伝えられる。

4月5日 フィンランド訪問中のスクビシェフスキ外相、リトアニアはまだ独立国としての条件を満たしていないので、現時点でポーランドはリトアニアの独立を承認しないと述べる。また、リトアニアの目標や原則は支持するが、リトアニアは東欧の安定を揺るがすべきではないとも。●下院で私有化法案の審議。説明に立ったバルツェロヴィチ議相は、90年第1四半期にインフレは抑止され、市場の状況も改善、失業率は2%以下であるが、生産の低下が見られると述べ、今回の法改正で大企業の私有化が可能になると述べる。討議

では外国資本によるポーランド経済の支配の危険性に関心が集まる。●グダンスク造船所の私有化計画（株式会社化）が報じられ、産業省もこれを確認。

4月6日 下院、内務省改組法を可決。国家保安局を解体し、警察機構から切り離された文民から成る国家擁護局を新設して、これが情報活動、対国家犯罪への対応などにあたる。●5月3日憲法記念日を国民の祝日にする法案も可決。●大蔵次官、90年第1四半期の貿易黒字は7億7800万ドルと公表。●旧統一労働者党、統一農民党、民主党、社会主義青年同盟などの占有資産の調査の結果、大部分が国有資産として国に返されることに。

4月7日 ベントコフスキ法相、ポーランドがソ連に、ソ連国内でのポーランド人の強制労働に対する賠償を求めていると発言。●「連帯80」、政府経済改革計画を批判。

4月9日 ポーランド、チェコ、ハンガリー3国の大統領、首相、大臣がプラチスラヴァで会談。

4月10日 フレサ委員長、大統領就任への意欲を確認。「改革のスピードを上げるために」。●ポーランド農民党「再生」（旧統一農民党）と国民党が地方議での選挙協力を発表。

4月11日 ヤルゼルスキ大統領、4日間の日程で訪ソ。●下院、検閲廃止を可決。

4月12日 東独大連立政権が発足。統一政策の基本となる政策協定では、国境問題に關し、両独とポーランドの3国が国境保障条約案を作成。ドイツ統一後にポーランド、ドイツ両政府が調印し批准することを提唱。

4月13日 タス通信の声明は、1940年のポーランド人

将校大虐殺事件、いわゆるカティンの森事件（約1万5000人が殺され、4500人の遺体が見つかっている）について、ソ連内務人民委員部（NKVD）の犯行であることを初めて公式に認め、遺憾の意を表明。最近発見された文書から判明したとしている。同文書は訪ソ中のヤルゼルスキ大統領にゴルバチョフ大統領から手渡された。ポーランド政府は、ソ連の犯行自認は「長く待たれていたこと」とし、両国関係史のすべての空白が説明されることを望む、と声明。●ワレサ委員長はソ連の声明は道義的に正しいとし、虐殺にかかわった者の処罰と遺族への補償を求める声明。

4月14日 ヤルゼルスキ大統領はカティンを訪問、慰靈行事に参加。●訪問を終え両国は共同宣言を発表。ドイツ統一に関連して欧州の全国境の保全を強く求め。また、両国貿易の外貨による決済を明記。

4月15日 大統領スポーツマンはワレサの大統領選出馬表明に關し、「ヤルゼルスキ大統領は今すぐ辞任するつもりはないが、6年の任期いっぱい務めねばならないとも考えていない」と述べる。

4月17日 中央世論調査局の調査の結果、昨年11月に比べて各勢力の支持率が下降。下降率はワレサが33ポイント、政府33ポイント、上院32ポイント、「連帯」31ポイント、下院26ポイント。支持率最高はマゾヴィエツキ首相で85%、教会が74%で続き、以下下院、ワレサの順。ヤルゼルスキ大統領は32%。

4月18日 市民議会クラブ、リトニア独立撤回を求めるソ連のやり方に懸念を表明する声明。

【訳編：高橋初子】

編集後記

☆「とくに2日目以降は会場周辺に人影はなく、大会が開催されているとはとても思えない雰囲気だった」とグダンスクに赴いて「連帯」大会を傍聴してきた友人が伝えてくれました。81年秋の第1回大会を傍聴してあの熱気に感動した者の一人として、あらためて内外情勢の変化の大きさを実感します。

☆「ロシア人よりドイツ人が怖い」。ポーランドの世論調査の結果を報じた新聞の見出しだす（5月6日、読売朝刊）。ポーランド人のロシア嫌い、ソ連嫌いはつとに有名ですが、ドイツに対する気持ちも複雑でした。それが、統一ドイツの実現という最近

の激動の結果、こういう形で表れたのでしょうか。

☆前号でも触れましたが、グダンスク協定10周年にあたる本年夏、その記念日の8月31日を中心前後10日間ほどの日程でポーランド・ツアーアを実施します。10周年記念集会に参加するほか、「連帯」関係者と交流し、あわせてオシフィエンチム（アウシュビッツ）などを訪れる、という趣旨です。近く最終計画をお知らせしますが、興味ある方は事務局までお問い合わせ下さい（郵便にて）。

☆本月報は次号で100号を迎えます。「連帯」大会特集として、少し遅れて7月10日刊の予定。本紙への批判、意見などお寄せ下さい。6月20日までに到着分を次号に掲載します。 1990年5月23日（み）

☆☆ ポーランド月報既刊号目次 ☆☆

1990年1／2月号（通巻94／95号） 28頁 500円

各国の自決権の尊重を 3

　　フルシャワ条約機構外相会議における

　　マゾヴィエツキ首相の挨拶

マゾヴィエツキ政府の経済計画の概要 4

　　バルツェロヴィチ蔵相の記者会見

ポーランドのラジオ・テレビの役割 20

　　アンジェイ・ドラヴィチ新議長の

　　スタッフへの演説

ポーランド日誌 1989年10月13日～11月7日 26

1990年3月号（通巻96号） 24頁 400円

ヤルゼレスキ将軍、戒厳令を語る 3

『カゼタ・ヴィボルチャ』紙のインタビュー

問題の核心は何か 14

　　—新しい「連帯」の時代を迎えて

　　ステファン・キシェレフスキ

ポーランド日誌 2／21

1989年11月9日～1990年1月11日

1990年4月号（通巻97号） 20頁 400円

ポーランドの新しい対立構造 3

　　ヤドヴィガ・スタンシキス

クオ・ヴァディス・ポローニア 6

　　—ポーランドの道

　　プロニスワフ・ゲレメク

問題の核心は何か（続） 11

　　—新しい「連帯」の時代を迎えて

　　ステファン・キシェレフスキ

ポーランド映画紹介 17

　　クシシュトフ・キエシロフスキ作『アマチュア』

　　—大変革の起爆力秘める映画

　　李 原宇

ポーランド日誌 1990年1月12日～2月21日 2／18

1990年5月号（通巻98号） 20頁 400円

円卓会議後のポーランド情勢 3

　　報告：コンスタンティ・ゲーベルト

戒厳令体制を超えて 10

　　コンスタンティ・ゲーベルト氏と語る

　　工藤幸雄

新しい体制と「連帯」の任務 14

　　インタビュー：ヴワディスワフ・フラシニエク

リトニアの自由はロシアの自由 17

　　アダム・ミフニク

ポーランド日誌 1990年2月22日～3月14日 18

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 -国ビル3F

電話 03-261-2585

郵便振替 東京 2-81069

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)